大学生における対人不安に関する研究

ー社会的外向性・独立性との関連についてー

0707029
黒川　裕介

【目的】

本研究は、八木(2008)の示した大学生における対人不安と社会的外向性、独立性には関連性があるという結果を強めるため、追試的研究を行う。八木(2008)が示した対人不安と社会的外向性、独立性との関連について再度検討し、八木(2008)と比較をすることを目的とする。また、性差についての検討も目的とする。そこで以下の仮説を立てた。

仮説１：対人不安は社会的外向性、独立性とそれぞれ関連がある。

仮説２：対人不安と社会的外向性、独立性の関連の仕方には性別による違いがある。

【方法】

北海道の私立大学在学中の大学生 157 名(男性 61 名、女性 96 名)を対象に質問紙調査を行った。

質問紙は、学年、年齢、性別で構成されたフェイスシートと①対人不安測定尺度(八木 2004)の 35 項目(因子構造は因子 1「他社への照れ・気恥ずかしさ」、因子 2「他者からの受容」、因子 3「他者の印象への過剰意識」、因子 4「自己卑下・劣等感」、因子 5「対人的緊張・あがり」の 5 因子から構成される)を 7 件法、②矢田部ギルフォード性格検査の「社会的外向性」を測定する 10 項目を 3 件法、③独立意識尺度(加藤・高木 1980)の 10 項目を 5 件法で回答させた。

【結果と考察】

はじめに、各尺度の項目を得点化して t 検定と尺度の信頼性分析を行った。その結果、対人不安において有意な性差が見られたのは 5 項目であり、4 項目は女性の平均値が男性よりも有意に高かった。対人不安を構成する 5 つの因子には性差は見られなかった。社会的外向性において有意な性差が見られたのは 1 項目であり、女性の平均値が男性よりも有意に高かった。独立性において有意な性差が見られたのは 2 項目であり、男性の平均値が女性よりも有意に高かった。また、各尺度の信頼性分析の結果、内的整合性は確保された。

次に、対人不安と社会的外向性、独立性との関連を検討するため、対人不安を構成する 5 つの因子と社会的外向性、独立性との間で男女別に相関分析を行った。その結果、社会的外向性において、男女共に対人不安の因子 3、因子 4、因子 5 との間で負の相関が見られ、独立性においては、男性では対人不安の因子 1「他者への照れ・気恥ずかしさ」との間で負の相関が見られ、また、男女共に、対人不安の因子 3、因子 4、因子 5 との間で負の相関が見られた。

最後に、従属変数を社会的外向性、独立性とし、対人不安を構成する 5 つの因子を独立変数とする重回帰分析を男女別に行った。その結果、社会的外向性において男女共に、因子 2(正の寄与を示した)、因子 4(負の寄与を示した)、因子 5(負の寄与を示した)の 3 つが影響を及ぼす可能性が示唆された。独立性においては男性では因子 4(負の寄与を示した)のみが影響を及ぼす可能性が示唆され、女性では因子 2(正の寄与を示した)、因子 4(負の寄与を示した)、因子 5(負の寄与を示した)の 3 つが影響を及ぼす可能性が示唆された。

以上の結果から、対人不安と社会的外向性、独立性には関連があることが明らかになった。また、対人不安と社会的外向性との関連には性差は見られなく、対人不安と独立性との関連については性差が見られることが示唆された。本研究は結果として八木(2008)の結果を強められたものの、相関が見られた因子や従属変数に影響を及ぼす可能性のある因子といった、わずかの違いが見られた。

今後の展望として、調査対象者の人数や、地域、男女比について考慮し、また、分析方法の改善や新たな分析を使用することが理想だと考える。

（指導教員 豊村　和真　教授）